

— 広 告 —

KIT
キャンパス
レポート
文・出島二郎
マーケティングプランナー



柳田 茉莉子 (やなぎた まこ)
金沢工業大学大学院工学研究科
バイオ・化学専攻
博士前期課程一年
新潟県立三条高等学校出身

行動力と積極性と好奇心。 それが留学へと導いてくれました。

柳田さんはロチェスター工科大学で九週間の語学留学のあと、ロズハルマン工科大学で六ヶ月、専門科目を履修した。その成果を卒業研究として「日本とアメリカの大学生における飲酒文化の違いに関する調査」にまとめた。ちなみに留学の背景には、高校時代にイギリスへ一週間の短期研修に行ったことや両親の勧めもあった。

「父が長年、文藝春秋を愛読していて、金沢工大はいい大学だと思っと思っていました。応用バイオ学科は、バイオ工学、脳科学、遺伝子工学など、入ってから自分の専門を選べるというのがあって受験しました。また、何かしらの形で留学をと心に秘めていて、今回の留学を活かして修士へ。もともと食品に興味があり、その分野

の研究をしよう」と。

指導教授の尾関健二先生は清酒メーカー大関の出身。専門分野は麹菌や酵母などの発酵・酵素利用、発酵微生物の分子育種、機能性食品・化粧品素材の開発などである。とくに麹菌(国菌)に恩返しできるようにと精力的に日本酒の復権のプロジェクトに関わっている。

「尾関先生は、地域貢献など、いろんなことを幅広くやられています。知識が広いこと、学生との距離が近いところが魅力ですね。今の研究テーマは「αEGの食品応用」です。αEGというのは人の線維芽細胞に作用してコラーゲン生産を促進する物質です。これは日本酒特有の含有物で、なぜか北陸の酒には多いんです。」
研究室では、他にも小麦フスマの有用活用やレジスタントプロテインの研究なども行っている。これらを酒蔵といっしょに盛り上げて地域にも貢献していくことが、

研究室のテーマの一つなのだ。

「学生の好奇心をかきたてて可能性を広げてくれる大学です。それに学力に不安があっても、数多くの課題を出して全体を底上げしてくれます。ある意味で、入りやすく出にくいアメリカ式の大学かな。応用バイオ学科には自由配属制度というのがあり、学部一年次から興味のある研究室に入ったりして指導を受けることができます。自ら動けば教職員のみならずが全力でサポートしてくれます。」

就職希望は、食品や醸造などの研究開発職で、新潟や石川の酒造メーカーも視野に入れている。いづれにしても、美しく、美しく、そして地域との関係が就活のポイントのようだ。広く世界を視た目で、小さくとも豊かな社会があることに注目しているのである。

金沢工業大学

石川県野々市市扇が丘七
電話番号(076)2481-2000